

[ご注文はこちらから→](#)

シンポジウム 「関東の近代キリスト教建築の現在」 資料集

目次

1. シンポジウム開催趣旨	海老澤模奈人（東京工芸大学）	1
2. 講演発表論文		
・群馬の近代キリスト教会堂 -関東地方に現存する教会建築-	星和彦（前橋工科大学）	5
・近代日本における布教拠点としての教会建築～カトリック横浜教区を事例として～	片山伸也（日本女子大学）	7
・日本基督教団島村教会の建築的価値	黒津高行（日本工業大学）	12
・世田谷区の教会建築 ～ 富士見丘教会と聖愛教会にみる文化財としての価値	堀内正昭（昭和女子大学）	14
・根津教会の保存改修計画～関係者との保存の意義に関する議論について～	田代洋志（東急設計コンサルタント）	20
3. 調査報告：関東地方に現存する近代キリスト教建築		
・関東の近代キリスト教建築現況調査について	海老澤模奈人（東京工芸大学）	26
・関東地方に現存する近代キリスト教建築リスト		32
・教会建築調査報告		
・茨城県		34
・栃木県		36
・群馬県		40
・埼玉県		44
・千葉県		47
・東京都		51
・神奈川県		66
・近年の取り壊し事例一覧 および 参考事例		76

## シンポジウム「関東の近代キリスト教建築の現在」開催趣旨

海老澤模奈人（東京工芸大学）

本シンポジウムは、関東地方に現存する近代（1945年以前）に建設されたキリスト教建築の現状を把握し、その建築的・歴史的価値を考えるための試みである。

この活動の契機は、昨年度、「イエズス会無原罪聖母修道院 東京黙想の家」の保存要望書を関東支部長名で提出したことにあった。チェコ人建築家ヤン・ヨセフ・スワガーの設計とされる建築の建て替え計画の情報を受け、関東支部歴史意匠専門研究委員会で保存要望書を準備することになった。四谷のイエズス会本部を訪れ、2011年10月に要望書を提出したが、保存活動も功を奏さず、今年1月には取り壊されたと知った。

その時、日本におけるキリスト教建築の評価の難しさを感じた。それは西洋と比較しての問題である。

西洋建築においてはキリスト教会堂はもっとも重要なモニュメントであり、教会を中心に建築の通史が語られるといっても過言ではない。しかし、それが日本に入ってくると周縁的なテーマのひとつになってしまう。確かに中には長崎の教会群や東京のニコライ堂のように文化材的価値が認められている例もあるが、多くはその価値が十分に評価されていないように思われた。

その背景には、日本と西洋のキリスト教をめぐる歴史と環境の違い、すなわち日本におけるキリスト教の受容が限られた人々のものであり、その建築が多くの場合私的なものと見なされてきたこと、またその受容経緯の複雑さなどがあるのだろう。しかし、そもそも関東地方にどのような教会建築が残っているのかもよくわからず、それを知るための信頼に足る資料も存在していないことが気になった。

キリスト教建築が日本においてはなぜ十分に評価されず、次第に取り壊されていっているのか。それを知りたいという思いが本シンポジウムの計画の発端にあった。そのテーマを委員会で議論していく過程で、まずは対象の現状を把握し、その価値付けを専門的見地から行うことが先決だという意見があり、急遽、関東の近代キリスト教建築の現況調査を実施することとなった。調査では、

関東地方に現存する近代キリスト教建築 76 例を委員で手分けして訪問し、調査報告を作成した。その成果をまとめたのが本冊子の後半に掲載した資料である。

今回のシンポジウムでは、この調査の成果をもとに関東の近代教会建築の全容を提示すると同時に、5人の論者による講演をとおしてその建築的・歴史的価値を考えていきたい。

講演者は、これまで近代の教会建築の価値付けにかかわったことのある研究者、日頃からキリスト教会とかかわりのある建築史研究者、そして実際に教会堂の価値を見出し保存改修を手がけた建築家である。西洋建築史、日本建築史、近代建築史、建築設計の専門家が名を連ねている点で、専門の垣根を越えた新しい建築史のテーマがここから発展する可能性を期待している。本シンポジウムを第一弾として、近代キリスト教建築に関するより具体的なテーマについての企画を第二弾、三弾と発展させていきたい。

最後に、調査にご協力いただいた教会関係者の皆様に心より感謝申し上げたい。

調査の過程では、各教会の方々には好意的に対応していただき、多くの情報を得ることができた。教会の管理者と話す中で、歴史的な教会建築が抱えている問題点についても改めて知ることができた。建築の老朽化と耐震性の問題、信者の高齢化に伴う設備の問題、典礼形式の変化と教会平面の使い勝手の問題、改修のための資金の問題などである。しかし同時に、歴史をもった古い教会建築に対する関係者の愛着も多かれ少なかれ感じ取ることができた。

調査は短い期間の限られた条件によるものだったが、貴重な成果をもたらすものとなったと思う。今回のシンポジウムと資料が、多くの方々に時代を経た教会建築の価値を再認識してもらうきっかけになれば幸いである。